

ダンツィ：木管五重奏曲

イタリア系ドイツ人のダンツィは、ベートーヴェンと同時代の作曲家で、モーツァルトを敬愛していた。計9曲ある木管五重奏曲の中で本作が一番の人気作。アレグレットの第1楽章は、ホルンが奏でる牧歌的な第1主題がとりわけ魅力的。哀愁を湛えたオーボエの旋律で始まる第2楽章はアンダンテ。フルートが聴かせる快活なメロディは、妖精の踊りを想わせる。第3楽章は陽気なメヌエット、中間部はレントラー。ロンドの終楽章は、オーボエとフルートが挨拶を交わし終わると、それぞれの楽器が技巧を駆使して走り出す。

モーツァルト：アダージョ（木管五重奏版）

1782～83年頃の作品とされる。音楽学者 A. アインシュタインが主張するように、フリーメーソンの何らかの儀式用に使われた、というのが通説。続けて鳴らされる三つの主題は、トントントンと“戸を叩くリズム”を暗示しているとも。短い作品だが、不思議な静謐さに満ちていて、ゆっくりと威厳をもった行進には適しているかもしれない。原曲は2本のクラリネットと3本のバセットホルンのために書かれており、名手であったアントンとヨハンのシュタードラー兄弟が念頭にあったのだろう。

モーツァルト：ピアノと管楽のための五重奏曲

1784年3月30日に完成した“まったく新しい大五重奏曲”の謳い文句で知られる、神童の自信作。たおやかなピアノと管楽器の交歓で始まる第1楽章。長いラルゴの序奏の後に、管楽器群がファンファーレを吹き鳴らし、ピアノが颯爽と第1主題を奏でる。第2楽章はソナタ形式のラルゲット。ほのかな悲しみを漂わせた最上のロココ趣味の音楽だ。愉悦感に満ちた第3楽章はロンド・ソナタ形式。華やかな技巧を聴かせるピアノに対し、管楽器をソリストティックに扱うことで、協奏曲になる一歩手前で踏みとどまっている。

ヒンデミット：小室内音楽

1922年にわずか5日で書き上げられた。第1楽章は三部形式。トットコトットコと聴こえるリズムパターンがユーモラスに楽章を彩る。第2楽章はのんびりと静かなワルツ。“落ち着いて、素朴に”と指示された第3楽章は、フルートとクラリネットが奏でるハーモニーが幻想的。行進曲風の伴奏が変わると、オーボエやフルートが孤独な歌をうたう。わずか23小節の第4楽章は、各楽器のソロが巧みに挟み込まれ、まるで人が言い争っているかのよう。第5楽章ではトゥッティとソロが快活に吹き鳴らされ、喧騒と弦音が交錯する。

トゥイレ：六重奏曲

トゥイレは R. シュトラウスの父で名ホルン奏者だったフランツ・シュトラウスの援助で世に出た。ホルンに華を持たせたこの作品は、フランツへのリスペクトそのもの。アレグロ・モデラートの第1楽章はソナタ形式。ピアノのトレモロに導かれて、ホルンが牧歌的な第1主題を奏でる。のびのびとしたホルンの歌で始まる第2楽章はラルゲット。音楽は徐々に雄大な盛り上がりを見せる。第3楽章は軽快なガヴォット。急速な中間部では、オーボエが諧謔味あふれる旋律を奏でる。第4楽章は狩りのロンド。主役のホルンが細かいパッセージを吹奏する。管楽器とピアノが掛け合うコーダは爽快感満点。